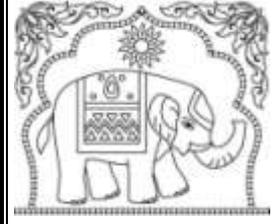


まいとりに मैत्री

No.19 平成 25 年度 冬号 -2013. 1. 9-
東洋大学教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

नववर्षाभिनन्दनम्

謹賀新年

～東洋大学仏教会・仏教青年会の忘年会が開催されました～



2012年12月25日(火)、仏教伝道協会ビル内のレストラン「菩提樹」に60名を超える人々が集まり、東洋大学仏教会・仏教青年会の忘年会が行われました。最初に東洋大学仏教会会長渡辺章悟先生から開会挨拶があり、立正大学の三友健容先生、大正大学の小峰彌彦先生のお二方からご挨拶をいただき、大正大学の勝崎裕彦先生の乾杯音頭によって忘年会がスタートしました。司会進行は落語家の春風亭傳枝さん。傳枝さんはインド哲学科卒業生で2年前に真打になり活躍中の方です。明るく賑やかに忘年会を盛り上げてくださいました。傳枝さんから、渡辺先生からの仏教会メンバー紹介文が読み上げられましたが、紹介の中に挟まれる深遠なダジャレに笑ったり

考え込んだり、傳枝さんもメンバーも忙しいことでした。今回の忘年会には中国、カナダ、ドイツ、韓国から多くの海外留学生の参加がありました。会場が盛り上がったところで、おまちかねのバリ舞踊の始まりです。踊るのは東洋大学インド哲学科の学生で、バリ舞踊講師のグスティ・アユさんと仲間たち。2曲披露されましたが、鮮やかな黄と真紅の衣装に身を包み、金のゴージャスな装飾品と長い黒髪を揺らせて舞う姿に魅了されました。1曲目は「プspanジャリ」という歓迎の踊り、2曲目は「ジョゲットブンブン」といって観客と一緒に楽しもうという踊りで、観客が1人ずつアユさんに誘われ中央に出て踊ります。照れながら出ていく人もアユさんのリードで気持ちよさそうに踊っていました。忘年会の大詰めは大ビンゴ大会。景品は諸先生方が寄贈して下さった数々の本、カレンダー、DVD、ボールペンやしおり、クッキー等々、様々な景品が用意されていました。会場の皆が1人につき2枚のカードに目を凝らし、読み上げられる番号に一喜一憂しました。「いくつもリーチになったのに肝心の番号はどうして出ないの！なぜビンゴにならないの！」と思いだおりにならない「苦」を味わった人も若干いたのでは(私だ)。会場は異様な空気に包まれました。ビンゴのあとは佐藤厚先生の校歌熱唱とエール。このエールを聞けば来年も大丈夫だという気になるのです。橋本泰元先生の締めにより忘年会はお開きになりました。

最後に勝崎裕彦先生が乾杯のときに披露された俳句を拝借します。 年満ちて感謝の思いたしかめる
それでは2013年が皆様にとって良い年でありますように！

針貝京子(インド哲学科2部3年)

【目次】

忘年会活動報告	……1	広島研修旅行報告	……2
倉田百三と仏教①	……3	興福寺の日常	……3
落語と仏教②	……4	タイの仏教事情⑬	……5
コラム「日本文化と仏教」⑮	……7	書籍・イベント情報	……9
今後の予定	……10		

仏教青年会研修旅行報告

「安芸国＜不動院＞と周辺の寺院をめぐる旅」

2012年度の仏教青年会の研修旅行は、11月1日から3日にかけて広島県を中心に安芸の国を巡る旅となり、また目的は、インド哲学科OBである麻生弘融さんが副住職を勤める安国寺不動院を訪ねることであった。安国寺不動院は、安国寺恵瓊ゆかりのお寺として有名だが、それだけではなく米軍による昭和20年8月6日の原子爆弾投下の際でも山麓に安国寺不動院があったといったような地理的条件のおかげで、本堂や様々な文化財などがその爆風から守られ、今なお、それらの重要な文化財が多く保存されている事も注目すべきところの1つとなっている。今回は、国宝である金堂が改修工事中で一般公開されていないのにも関わらず、今回は副住職の麻生さんの取り計らいにより、金堂の中やその中にある国重要文化財に指定されている木造薬師如来坐像なども見る事が可能となり、実際にその金堂へ入ってみると、私は不動院の本尊である薬師如来に圧倒され、言葉を失ったのであった。



そして、金堂の中で麻生さんによる安国寺不動院の歴史や金堂そのもの、そしてその建築様式などに関する解説がなされた。その説明の途中、今回の旅行に同行した、あるインド哲学科の先輩が、安国寺不動院の金堂の建築様式を見て、神奈川県鎌倉市にある臨済宗大本山として有名な円覚寺の舍利殿の建築様式に凄く似ていると言っていた。旅行から帰って、鎌倉円覚寺の舍利殿の写真を見て不動院の金堂と比較してみると確かに似ていると感じた。何故似ているかという、不動院の金堂と鎌倉円覚寺の舍利殿の建築様式は、典型的な唐様（禅宗様）建築といった同じ種類の建築様式だからだ。ここで私に更なる疑問が湧いてきた。何故、真言宗の別格本山である不動院の一部分に典型的な唐様建築が使われているのか、という疑問である。調べてみると、実は不動院の金堂は最初からあった訳ではなく、山口県山口市にあったとされる禅宗寺院の凌雲寺から安国寺恵瓊によって移築されたものと分かった。ただ、現在この凌雲寺は存在せず遺跡となって国の史跡の指定を受けている。

金堂内での麻生さんの解説の後も、特別に木造薬師如来坐像以外の安国寺不動院にある文化財を見させていただく事が出来た。特に印象に残ったのは、絹本著色両界曼荼羅（金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅）であった。実際にすぐ近くの距離で曼荼羅を見るのが私は初めてのことで、薬師如来の時とはまた違う衝撃を受けたのであった。その他にも、安国寺恵瓊関係の書状や豊臣秀吉の朱印状などと言った大変重要な文化財を見せていただき、色々と勉強が出来たと実感している。

また、不動院以外にも今回の研修では様々な地を訪れた。宮島では世界遺産である厳島神社の他、真言宗御室派の大本山である大聖院に赴いた。大聖院は非常に風光明媚な寺院で、山の中腹から一望できる瀬戸内海の景観と風を五感で感じ、一時でも都会の喧騒を忘れ、のどかな時間を過ごすことが出来た。さらに、フェリーで大三島に移動し、そこでは全国の国宝・重要文化財の武具甲冑のうち約 8 割が集まるといって大山祇神社を参拝した。道中はサイクリングで移動し、学生とはいえ普段からの運動が不足しがちな一行に、久々に訪れた健康的な日々であった。

しかし、今回の研修の目玉はなんといっても不動院であり、普通では見ることのできない国宝や重要文化財を拝見できたのはとても貴重な経験だった。最後に、今回の研修旅行は、インド哲学科 0B で安国寺不動院の副住職を勤める麻生弘融さんの協力が無ければ、ここまで充実したものにはならなかったであろう。紙面上ですが、ここでまた御礼を申し上げたいと思う。麻生さん、ご協力ありがとうございました。

鈴木鉄平（インド哲学科 1 年）

倉田百三と西田幾多郎 ①



西田幾多郎（1870～1945）の処女作『善の研究』は、出版から 100 年以上経った今なお読み継がれる、日本を代表する哲学書である。同書は西田が金沢の第四高等学校にて教鞭をとっていた頃の倫理学の講義録を原型とし、明治 44 年（1911）に弘道館より出版された。当時西田は 41 歳。大学で哲学教授になることを熱望し続けた末、旧友の縁によりようやく京都帝国大学に助教授の職を得た頃である。出版当初の売れ行きは芳しくなかった『善の研究』だが、10 年後の大正 10 年（1921）に岩波書店から再版されて以降、哲学書としては異例の売れ行きをみせるようになる。これは同年、同じく岩波書店から刊行された倉田百三の小論集『愛と認識との出発』（1921）において『善の研究』が絶賛されていたことがきっかけだと言われている。

『愛と認識との出発』の著者倉田百三は、大正六年（1917）に岩波書店より出版された戯曲『出家とその弟子』により当時既にベストセラー作家として知られていた。『出家とその弟子』は親鸞とその弟子達との対話を中心とした宗教や恋愛をテーマとする戯曲作品だが、同書は刊行されるやいなや評判となり「今の人々は一寸想像が出来ない程、この本は売れた」（『日本現代文学全集 84』月報）と後に武者小路実篤（1885～1976）が回顧するほどの大ベストセラーとなった。同書を読んだ和辻哲郎（1889～1960）は「あの生命に充ちた作を涙と感激で読んだ」（和辻哲郎『倉田氏の「文壇への非難」に就いて』）と語り、

西田幾多郎の門下生である高坂正顕（1900～1969）は「私はその感激を同室の友人たちに話さずにはおけなかった。このような著者を発見したことが、まるで自分自身がこのような書物を書いたことと同じであるかのように」（高坂正顕『西田幾多郎と和辻哲郎』）と述べ、『出家とその弟子』との出会いが哲学の道にすすむきっかけの一つであったと振り返っている。

また、『出家とその弟子』の影響は国内だけに留まらない。同書の英訳版を読んだフランスの文豪ロマン・ロラン（Romain Rolland 1866～1944）は感動を伝える手紙を倉田宛にしたため、フランス語版『出家とその弟子』の序文はロラン自らが筆を取っている。そこで彼は同書を「極東精神」の「蓮の花」と「西洋精神」の「百合の花」とが「互いに結びついてよく調和した」作品であると解説し、更には現代アジアの宗教文学で「これ以上純粹なものを私は知らない」とまで絶賛している。

このように世界中を感動の渦に巻き込み、刊行から 100 年近くが経った今なお再版され続けている『出家とその弟子』だが、その根柢に倉田が高校時代に傾倒した西田幾多郎『善の研究』の影響が色濃く残っていることは意外と知られていない。次稿では倉田百三が西田幾多郎から受けた影響について、まずはその生い立ちから振り返っていくこととする。

山口修三（大学院哲学専攻博士前期課程 2 年）

興福寺の日常 ①

僧侶の生活というと、何となく「朝早い」とか「何時間もお勤めをする」などのイメージがあるだけで、実際のところはあまり知られていないのではないのでしょうか。今回は、興福寺の役僧である私の日常、行事等がない、ごく普通の日をご紹介します。

朝は6時から各お堂をお参りして回る「堂参」を行います。この堂参は、本来は入寺から10年以降に受けられる「堅義」という法相宗の僧侶として一人前と認められるテストが終わるまで続けることになっているのですが、現在は入寺から3年程度続けることになっています。

堂参では興福寺の主要な堂塔を全て回ります。回る順に列挙すると、五重塔・東金堂・国宝館(旧食堂)・仮金堂・北円堂・三重塔・南円堂・一言観音堂・不動堂・菩提院大御堂・本坊持仏堂の11箇所。『般若心経』はどのお堂でも必ず唱え、その他はお堂に応じて『唯識三十頌』『普門品偈(観音経)』『自我偈』などを唱えます。また最後の本坊持仏堂では『普門品』を偈だけでなく、最初から全て唱えます。所要時間はおよそ1時間半。冬場のこの時期、出発する時間はまだ真っ暗です。もちろん服装は衣ですので防寒にも限界がありますし手袋を着用するわけにもいかないので手はすぐにかじかみ、数珠の扱いが上手くできなくなります。



興福寺 北円堂

これとは別に朝の勤行が行われているのですが、時間の関係で堂参をしている僧侶は参加しなくてよいことになっています。この勤行は朝7時半から本坊持仏堂で行われており、『心経』『自我偈』『観音経』『三十頌』をお唱えしています。

堂参が終われば朝食です。特に僧侶で集まって食べるということはなく、各自で食べます。私の場合、本坊の敷地内の離れに住んでいますので、自室で食べています。

8時になると東金堂を開けに行きます。これは数人で持ち回りなのですが、私が週のうち半分くらいは開けに行っています。興福寺では通常、中を拝観できる場所が東金堂と国宝館の2箇所、朝9時から拝観開始です。それまでにお堂を開けて、職員さんと一緒に掃除や花の水換えなどの準備をします。

9時には本坊に戻り、少し休憩の後に持仏堂の掃除をします。小さなお堂ですがこちらは一人で行いますので30分程度はかかってしまいます。

その後、10時には本坊内の寺務所の自分のデスクへ行き、パソコンの電源を入れてメールのチェックをすることから、世俗の業務が始まります。興福寺では僧侶の数が少ないため色々な仕事をしなければなりません。事務、来客のお茶出し、行事の準備、各現場への必要な物の配達、運転手等なんでもやります。

そのようにして午後5時になると東金堂を閉めに行きます。簡単に点検をしてお堂を閉めればその日の業務は終了です。

夕方の勤行は特に定まっておらず、各自に任されています。私の場合は興福寺に入る前から行っていたチベットの勤行を自室の仏壇で行なっています。

以上のように、興福寺の日常は、朝以外は決まった修行がありません。それ故に個々人に任されている面が多く、自分の時間を使って勉強や修行をすることが必要になります。私も多忙を理由に懈怠を起さぬよう、努力していきたいと思っています。

板野弘映(仏教会会員 興福寺僧侶)

落語と仏教 ②

一年少々のご無沙汰で、落語と仏教第二回です。(前回は14号に掲載)

落語は大きく分けると「古典落語」と「新作落語」があります。「古典落語」という名前を聞くと江戸時代というイメージが強いでしょうが、実は明治～昭和初期に成立したものがかなり多く、高度経済成長以降に東京の街から江戸の空気が消えてゆくまでは当たり前のような庶民の日常を描いていました。神仏に対する庶民の信仰も、徳川幕府や明治政府の政治的な操作もありましたが、それなりに日常生活に溶け込んでいて、落語の中には仏教そのものを題材にしたものもありますし、登場人物の行動や言葉の中にもそういったものを垣間見することもできます。たとえば家の中にはお茶の間があり、仏壇があり、朝夕にお年寄りがお経を唱えているのは当たり前前の風景でした。ところが落語の方では、熱心にお勤めしているかと思いきやただただ習慣化しているだけで案外身が入っていない、というところが主眼となります。



念仏を唱えながらもまわりのことが色々と気になって仕方がなく、女房に小言ばかり言っている。やれ花が枯れている、お供え物はもう食っちゃったのか、子供を起こして早く学校にやれ、朝飯の味噌汁の中身はどうする…「ナンマンダブナンマンダブ、何、芋だあ？時間が掛かってしょうがないよ、表にどじょう屋が通るから…ナンマンダブナンマンダブ…大きな声で呼びなよ、どじょう屋あ～～！…ナンマンダブナンマンダブ…鍋に酒入れて火にかけるんだ、跳ねるからふたあおさえとけよ…ナンマンダブナンマンダブ…静かになった？ふた開けてみな。何？腹出して死んでる？ハハハ、ざまあみろい！ナンマンダブナンマンダブ…」

この念仏で阿弥陀仏の本願どおりこの親父が極楽往生できるか否か、という議論はここでは置いていただきまして、気もそぞろな上にはては殺生と念仏が同居してしまうという、この俗物性の見事な描き方を味わっていただきましょう。

年が明けると寄席は元日から正月興行で賑やかです。私も各寄席に出演しておりますので、ご興味のある方はぜひ、正月気分を味わいにいらしてください(詳細はホームページ <http://www.rak2.jp/town/user/koinosuke/>にて)。来月末には演劇に出演しますのでこちらもよろしくお祈りします！

1月25日(金)～27日(日)「一目惚れと呑み屋での会話と殺意について考えてみた」

25日(金) 19:30～

26日(土) 13:00～、16:30～

27日(日) 13:00～、16:30～

チケット 3,500円 千本桜ホール(東急東横線学芸大学駅徒歩1分)

ご予約・お問合せ: t_koinosuke@hotmail.com 03-5964-1302(伝枝)

春風亭伝枝(落語家 仏教会会員)

タイの仏教事情 ⑬

—タイの寺院(2)—

前号の続きとして、タイの寺院について紹介したいと思います。

王様の遺骨が納められている寺院

ラーマ4世は、ラーマ1世が建立した寺院であるワットポーの本尊の台座の中にラーマ1世の遺骨を納められました。その時から王様の遺骨は、本尊の台座の中に納められるようになりました。チャックリー王朝の各王様の遺骨は、次の寺院に納められています。

ラーマ1世：ワットポー寺院の本尊の台座、ラーマ2世：ワットア
ルン寺院の本尊の台座、ラーマ3世：ワットラーチャオーラサーラーム
の本尊の台座、ラーマ4世：ワットラーチャプラディットサティットマ
ハースィーマーラームの本尊の台座、ラーマ5世：ワットベンチャマボー
ピットドゥシットワナーラーム寺院の本尊の台座、ラーマ6世：ワッ
トプラバトムチェューディーの北の礼拝堂に安置されている仏立像の台
座、ラーマ7世：ワットラーチャボーピット寺院の本尊の台座、ラーマ
8世：ワットスタット寺院の礼拝堂のプラーシーサーカヤムニーという
仏像の台座



ラーマ5世が建立したワットベンチャマボーピ
ットドゥシットワナーラーム寺院の本堂

寺院の見どころ

1) 境内

寺院の境内には一般に本道、礼拝堂、仏塔などがあり、宗教儀礼（kamma, 羯磨）を行う、タイ語でプッターワート（仏陀の地域という意味）という所と、僧坊があるタイ語でサンカーワート（僧坊の地域という意味）という所に分けられています。僧侶がいないエメラルド仏寺院などには、サンカーワートはありません。

2) 本堂

本堂は寺院で最も重要な場所だと考えられています。本堂では、出家式などのいろいろな仏教儀式が行われたり、僧侶が朝のおつとめとしてお経をあげたり、布薩日の説法などが行われたりします。

本堂と礼拝堂は、見ため似ていますが、本堂のまわりには、「バイセマー」と呼ばれる聖域を表す石が計8ヶ所に置かれています。「バイセマー」は、普通のハート型に似た菩提樹の葉の形をした石の板で、1枚のものと2枚1組になっているものがあります。それは寺院の位による違いで、王室寺院はほとんど2枚1組の「バイセマー」が置かれています。

王室寺院に2枚1組の「バイセマー」が置かれるようになったのは、スコータイ時代からです。スコータイ時代の王様は、スコータイで仏教を広めるためにスリランカから僧侶を招きました。しかし、スリランカの僧侶は、タイの「バイセマー」が気にいらなかったため宗教儀礼を行いませんでした。そこで王様は、スリランカの僧侶にバイセマーをもう1枚付け加えるように頼みました。それ以来タイの王室寺院には2枚1組の「バイセマー」が置かれるようになったのです。

「バイセマー」の真下には、ルークニミットという僧侶の持つ鉢くらいの大きさの丸い石が埋められています。ルークニミットは本堂の場所を示すものです。

バイセマーは、スムセマーと呼ばれる石の囲いでおおわれていることがあります。スムセマーの少し外側には本堂のまわりに低い塀があり、タイ語では、カムペンケーウ（宝石からできた塀という意味）と言います。本堂の位置はこの塀によってはっきりします。

（この記事は、チュラーロンコーン大学成人教育センターにより出版した「タイ文化の魅力 歴史 美術 建築 他 観光ガイドの手引き」pp.86-88を参考にして執筆したものです。

プラマハチャポン (Phramahāchatpong Katapuñño) (大学院仏教学専攻博士後期課程3年)

～「日本文化と仏教」⑰～

西行の「法華經二十八品歌」

仏教会会員 作家 永田道子

西行は63歳のとき、伊勢の二見浦に草庵を結んで移り住んだ。時あたかも平清盛が福原に遷都し、年末には清盛の息子重衡が南都を焼討、戦乱の幕開けの年である。それから平氏が壇ノ浦で滅ぶまでの5年間、西行はその庵から人の世の無常を凝視していた。「聞書集(ききがきしゅう)」はその間、彼に師事した蓮阿(れんあ 生没年不詳。俗名・荒木田満良、家田とも)という人物が西行の歌を記録した稿本で、冒頭に「聞きつけむにしたがひて書くべし」とある。「法花経廿八品」はそのあとすぐ、何の説明もなしに列挙されている連作である。

- 序品** 曼殊沙華 梅檀香風 つぼむよりなべてにも似ぬ花なればこずゑにかねてかゑる春風
- 方便品** 諸仏世尊 唯以一大事 因縁故出現於世 あまのはら雲ふきはらふ風なくば出でてややまむ山のはの月
- 譬喩品** 今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子
乳(ち)もなくていはけなき身のあはれみはこの法みてぞ思ひしらるる
- 信解品** 是時窮子 聞父此言 即大歡喜 得未曾有
吉野山うれしかりけるしるべかなさらでは奥の花を見ましや
- 藥草品** 我觀一切 普皆平等 無有彼此 愛憎之心
ひきひきに苗代みづをわけやらでゆたかに流す末をとほさむ
- 授記品** 於未來世 咸得成仏 遅ざくら見るべかりける契あれや花のさかりは過ぎにけれども
- 化城喩品** 願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道
秋の野のくさの葉ごとにおく露をみつめば蓮の池たたふべし
- 同品文に** 第十六我釈迦牟尼仏於娑婆国中成阿耨多羅三藐三菩提
思ひあれやもちにひと夜のかげをそへて鷲のみ山に月の入りける 菩提心論之文心なるべし
- 弟子品** 内秘菩薩行 外現其声聞 岩せきてこける水はふかけれど汲まぬ人には知られざりけり
- 人記品** 寿命無有量 以愍衆生故 思ひありてつきぬ命のあはれみをよそのことにて過ぎにけるかな
- 法師品** 一念随喜者 我亦与授 阿耨多羅三藐三菩提記
夏草の一葉にすぎるしら露も花のうへにはたまらざりけり
- 宝塔品** 是名持戒 行頭陀者 則為疾得 無上仏道
かひなくて浮ぶ世もなき身ならまし月のみ舟ののりなかりせば
- 提婆品** 我献宝珠 世尊納受 いまぞ知るたぶさの珠を得しことは心のみがくたとへなりけり

勸持品	我不愛身命 但惜無上道	ねをはなれつながらぬ舟を思ひ知ればのりえむ事ぞ嬉しかるべき
安樂行品	深入禪定 見十方仏	深き山に心の月しすみぬればかがみに四方のさとりをぞ見る
涌出品	我於伽耶城 菩提樹下坐 得成最正覚 転無上法輪	夏山の木蔭だにこそすずしきを岩のたたみのさとりにかにぞ
寿量品	得入無上道 速成就仏身	わけ入りし雪のみ山のつもりにはいちじるかりしありあけの月
分別品	若坐若立 若經行処	たちみにもあゆぐ草葉のつゆばかり心をほかにちらさずもがな
随喜品	如説而修行 其福不可限	から国や教へうれしきつちはしもそのままをこそたがへざりけめ
法師功德品	唯独自明了 余人所不見	ましてましてさとの思ひは外ならじわが嘆きをばわれ知るなれば
不輕品	億々万劫 至不可議 時乃得聞 是法華經	よろづ世を衣のいはにたたみあげてありがたくてぞ法は聞きける
神力品	如来一切秘要之藏	くらぶ山かこふしば屋のうちまでに心をさめぬところやはある
囑累品	仏師智慧 如来智慧 自然智慧	さまざまに木曾のかけ路をつたひ入りて奥を知りつつ帰る山人
薬王品	容顔甚奇妙 光明照十方	花をわくる峯の朝日のかげはやがて有明の月をみがくなりけり
妙音品	正使和合百千万月其面貌端正	わが心さやけきかげにすむものをある夜の月をひとつみるだに
普門品	弘誓深如海 歴劫不思議	おしてるや深きちかひの大網にひかれむことのたのもしきかな
同品に	能伏災風火 普明照世間	深きねのそこにこもれる花ありといひひらかずば知らでやままし
		此歌真言可有見事
陀羅尼品	乃至夢中 亦復莫惱	夢の内にさむるさとりのありければ苦しみなしと説きけるものを
嚴王品	又如一眼之亀値浮木孔	おなじくは嬉しからまし天の川のりをたづねしうき木なりせば
勸発品	濁悪世中 其有受持 是經典者 我当守護	

あはれみの名残をばなほどめけり濁るおもひの水すまぬ世に

(岩波文庫 佐佐木信綱校訂『新訂山家集』所収 品名は原文のまま 旧字を新字に改めた)

どれも凝ったいいまわしや技巧的な表現が少なく、現代人にも十分わかりやすい。蓮阿は伊勢神宮内宮の権禰宜(ごんねぎ)をつとめ、晩年になって出家。西行に師事したのはまだ若い頃だから、西行は仏道・作歌ともに初学者の彼のために、あえて平易な表現を選んで詠んで与えたテキストだったのかもしれない。あるいは、西行自身、老境に入り、巧い歌をつくることより、思いのまま素直に詠むのが歌の本随という境地にいたっていたか。蓮阿は後に西行がつれづれに語った言葉を書き記した『西公談抄』も残しており、よほど心酔していたのであろう。

「聞書集」は仙台藩伊達家に藤原定家の自筆本が伝わった。蓮阿から提供されて自ら書き写したと考えられ、後に『新古今集』を撰編する際、この中から八首、選び入れている。集中には源平騒乱の事や西行の幼児期の遊びを偲ばせる歌や記述も見え、風俗史の観点からも貴重な資料である。仏教関係では「地獄絵を見て」といった連作や、長い詞書をともなった釈教歌の連作もあり、西行の晩年の仏教思想を窺わせるものになっている。

23歳で出家した西行は、長年、高野山で隠棲修行しつつも決して仏道一途ではなく、俗世との関わりも絶たなかった。そうするにはあまりに人間的で豊かな感情や他者への深い共感がそうできなかったのかもしれないが、

歌人の感性が彼のベースであったというべきであろう。そもそも連作という発想そのものが歌人のそれである。

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『仏教活論序論』

井上円了/著 佐藤厚/訳 (大東出版社 1575円)

近代西洋哲学に見出した真理が仏教の中に存在することを発見し、当時低迷の極みにあった明治仏教に「活」を入れるべく、独り敢然と立ち上がった若き井上円了。「妖怪博士」ではない“哲学者”井上円了の真骨頂が味わえる近代仏教の名著が、初の現代語訳にて甦る。本学非常勤講師の佐藤厚氏による現代語訳。

・『越後乙宝寺蔵 無言蔵大願著 梵学秘要篇』

高橋尚夫・佐久間秀紘/編 (ノンブル社 12600円)

江戸末期に仏画僧として活躍したのみならず、慈雲尊者の流れを汲む正統梵学の継承者ともいふべき無言蔵大願による梵学学習のための指南書で、梵字悉曇実修の手引書『梵学宗要章』と対をなす名著。版行を目されながらも未だ完成本をみない、幻の名著が百五十年の時を経て蘇る。

・『学問の開拓』

中村元/著 (ハーベスト出版 1260円)

世界的なインド哲学・仏教学者である故中村元博士が自ら書き記した、生い立ち、研究者への道、そして学問に対し貫き通した「勉め強いる」姿勢。「学問の開拓とは何か」。色あせることのない、博士の志を後世に伝える。生誕100年・中村元記念館開館記念出版としての復刻版。

・『イエスと空海 不二の世界』

ペテロ・バーケルマンズ/著 (ナカニシヤ出版 5040円)

キリスト教と真言密教、二つの教えを比較研究し宗教の普遍性を探る。カトリック神父にして、研究と修行を重ね真言密教を学んだ著者が、両者の教理とその共通性を中心に分かりやすく日本語で語った力作。各章末には付記として著者の貴重な宗教・修行の体験談も載せる。

・『目覚める宗教 アメリカに出合った仏教 現代化する仏教の今』

ケネス・タナカ/著 (サンガ 900円)

ビート仏教、ゴーズ・オン!! 仏教に新しい姿が、今のアメリカにある。アメリカが仏教に出合った。そして、仏教はアメリカに出合って、大きく変わった。スティーブ・ジョブズが傾倒した仏教、それはビートニクを経過し今に続くビート仏教だった。仏教のアメリカ伝来からたどり、最も新しい仏教の姿をここに描き出す。

○《イベント》

・芝・増上寺 正五九黒本尊祈願会

徳川家康公の念持仏「黒本尊阿弥陀如来」のご開帳と祈願

【日時】平成25年1月15日

13:00 法話 宮澤正順 上人

14:00 祈願法要 御親修

【お問い合わせ】増上寺 安国殿課 03-3432-1431 (代)

E-mail : ankokuden@zojoji.or.jp

当日は徳川将軍家墓所と経蔵の一般公開も行われます。

・金沢文庫企画展「救いへの祈り」

横浜市金沢区称名寺に伝来した聖教類や古文書、関連する仏像や仏教絵画などを展示し、死者供養に関連する文化財を通して、供養に込められた祈りの姿をたどる。

【会場】神奈川県立金沢文庫

【会期】平成25年2月15日～平成25年4月21日

【休館日】毎週月曜日、3月21日

【観覧時間】午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

【交通】京浜急行「金沢文庫」駅下車徒歩12分

JR 根岸線「新杉田」駅接続、シーサイドライン「海の公園柴口」駅下車徒歩10分

【お問い合わせ】神奈川県立金沢文庫 045-701-9069

・白隠展 HAKUIN 禅画に込めたメッセージ

市井の伝道師 白隠、現代の十字街頭 渋谷に現る!

【会場】Bunkamura ザ・ミュージアム

【会期】2012/12/22(土)～2013/2/24(日) ※1/1のみ休館

【観覧時間】10:00～19:00 (入館は18:30まで)

毎週金・土曜日は21:00まで(入館は20:30まで)

【交通】JR 山手線 渋谷駅ハチ公口より 徒歩7分

東急東横線・東京メトロ銀座線・京王井の頭線 渋谷駅より 徒歩7分

東急田園都市線・東京メトロ半蔵門線・東京メトロ副都心線 渋谷駅3a出口より 徒歩5分

【お問い合わせ】03-5777-8600 [ハローダイヤル]

・日光山輪王寺 強飯式

【会場】日光山輪王寺三仏堂(本堂)

【会期】4月2日 11:00～、14:00～

※開催時間は、主催者の都合により変更される場合があります。祈祷料3000円。

【交通】東武日光駅・JR日光駅下車バス7分

【お問い合わせ】

日光山輪王寺本坊 強飯式 TEL0288-54-0531

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

東洋大仏青・仏教会 新春行事

2013 開運祈願！ <寄居十二支めぐり>

日時：2013年1月13日（日）

集合：集合：JR 八高線・寄居町駅（役場駅側改札口）に 10 時 40 分

（池袋 9:01 発/小川町乗り換えが便利、東武東上線、or 秩父鉄道、or JR 八高線）

(1) 寄居町周辺に点在する十二支を巡ります。

中世は城下町、近世は宿場町として栄えてきた武蔵国（埼玉県）寄居町の十二支守り本尊霊場の八ヶ寺を巡ります。

(2) 十二支の一つ善導寺は、百人一首画格天井が有名。

千手観音菩薩がある善導寺の天井には、狩野派の絵師、金竜齋宗信が描いた 100 枚の百人一首天井画が有名です。すばらしいものです！

(3) 少林寺と 500 羅漢が圧巻です。

文殊菩薩のある少林寺の背景には羅漢山があります。その麓から山頂に向かう山道には、500 体を超える石仏羅漢像が点在しています。見ものです！

* お弁当は各自ご持参ください

* 解散は 15 時 30 分頃の予定（引率：渡辺章悟）

* 行程は約 12 キロ/所要時間は 約 3 時間 30 分

* 出発は秩父鉄道の寄居駅でゴールは波久礼駅となります。

<国宝聖天山歓喜院と熊谷の桜>

日時：2013年4月7日（日）

聖天山歓喜院は妻沼聖天（めぬましようでん）」といわれ、その本殿（聖天堂）は平成 24 年に国宝に指定されました。

「熊谷桜堤」は江戸時代から桜の名所として知られ、「日本さくら名所 100 選」の一つです。荒川の土手沿い約 2km にソメイヨシノ約 500 本が植えられています。

聖天山歓喜院 HP <http://www.ksky.ne.jp/~shouden/>

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も仏教会・仏教青年会をよろしくごお願い申し上げます。

編集責任者：鈴木洋志（インド哲学科 3 年）

仏教会・仏教青年会総会

2013年3月30日（土）14:00～16:00

教室や講演者などの詳細は、後日 HP

（<http://www.toyo-yimba.org>）にてお知らせします。

《語学勉強会》

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料で参加できます。）

○仏教漢文講読会

講師：橋川智昭

日時：隔週木曜 4-5 限

『大乘起信論』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学びます。参加希望者は橋川<kitsukaw@ff.iij4u.or.jp>までご連絡下さい。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の 6 限

『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。参加希望者は<li1000041@toyo.jp>までご連絡下さい。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～20:00

会場：6号館 4階 6408 教室

内容：ツォンカパの『ラムリム』『菩提心の儀軌』の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第 8 研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>